フランス・モーレヴリエの日本庭園

鈴木 誠*
河原 武 敏*
ベルナール・ジャネル**

The Japanese Garden of Maulévrier in France

Makoto SUZUKI
Takatoshi KAWAHARA
Bernard JEANNEL

摘要：20世紀初頭フランス西部、メーヌ・エ・ロワール県モーレヴリエ町に、フランス人建築家アレキサンドル・マルセルの設計になる、池泉回遊式の日本庭園が造られた。同国内でも最古かつ最大級の日本庭園でありながら、地元の人々にさえ良く知られずに、近年まで長年放置されていた。本研究では現地調査の結果をふまえ、この庭の現況と往時の姿、成立経緯と時代背景について、マルセルの他の業績と共にまとめた。

1. はじめに

この論文の目的は、筆者らが現地調査を実施したフランスのモーレヴリエ町に現存する日本庭園の現況とその成立経緯を明らかにし、この庭のもつ意味を考察することである。既に外国における日本庭園の初期の状況については、佐藤¹⁾により総説として述べられその全貌はかなり明確となっている。しかし、フランスの日本庭園については多くは知られておらず、特に現地でさえ知る人の少ないこの庭の調査を進めていくうちに、この庭が19世紀末にフランス人によって造られたもので、現存する最も古いフランスの日本庭園の一つであり、かつ外国人の手になる日本庭園の最も古いものの一つでもあることがわかった²⁾。この庭の往時の姿は日本の庭園文化がヨーロッパに渡って間もなくの具体像だったのである。

2. モーレヴリエの日本庭園の現況

(1) 東洋公園の概況

日本庭園を含む敷地全体の正式名称は「Le Parc Oriental de Maulévrier、モーレヴリエ東洋公園で、フランス西部、メーヌ・エ・ロワール (Maine et Loire) 県モーレヴリエ町にあり、県庁所在地アンジェ (Angers) 市の南西約60km、ショレ (Cholet) 市の南東12km、いわゆるヴァンデ (Vendée) 地方とポワトゥ (Poitou) 地方の境に位置する。日本庭園はこの公園の一角にありその主要部分をなしている。

公園としての正式開園は1985年6月。それ以前はモーレヴリエ・コルベール城公園 (le Parc du Château des Colbert à Maulévrier) と呼ばれ、地元では

一般に東洋植物園 (l'arboretum oriental) といわれていた。この名称が示すとおり、園地は現在見るルイ13世様式に再建 (1814~1830年) されたコルベール城に付随している。園地の中心は東洋的色彩をもつ部分、即ち日本式庭園で、その点景物として日本的なものの他に、カンボジアの宗教施設や石像をもつ。植栽は約130種の外来種 (75%の東洋・極東原産種、25%の北米種) と土地の樹木で構成されている。

町有園地の総面積は約28haであるが、現在レストランの個人経営が行われているコルベール城とその周辺、並びにプロティエ中学校 (le Collège D. Brottier) 校地を含む部分が1976年以前のこの地の全貌で、合わせて約30haにのぼる。

(2) 庭園の立地概況

庭園立地の自然条件としては、まず地形的に花崗岩の丘が続くヴァンデ (Vendée) 地方の北端にあたるヴァンデの森の端、モワヌ (Moine) 谷に位置することがあげられる。日本では「みかげ石」の名で花崗岩が庭に多用されるが、この地は地質的あるいは庭園材料的にみて極めて日本的要素に恵まれた環境にある。

またこの地方の気候は、アンジュー (Anjou) 地方としては雨量が多く、夏の乾燥期も通常は見られない。したがって庭園の立地するモワヌ谷も冬比較的暖かく、夏涼しい温暖多湿な気候で、植物生育にも適している。

園地構成はコルベール城の正面北東側に位置する整形式庭園に対し、城の裏側南西部谷地形内に位置する自然風景式の庭園 (日本庭園) が主体である。その中心はモワヌ川を人工的に堰き止めて造った池となっている。

* 東京農業大学農学部 ** バリ、ラヴィレット建築大学文化人類学研究所

図-1 モーレヴリエの日本庭園略平面図

池はモワンヌ川の流れ方向に細長い形をもつ。池の北東端、台地上の城より一段下がった位置に、後に詳述する設計者A. マルセルが書斎として愛用した、地元では‘Pagode’と呼ばれる庭園建築があり、その南側（池北東端）が日本式庭園の最も重要な部分となっている。

3. 日本庭園の形式と構成

日本式の庭園は池が中心で、城の下の方庭園建築を起点として池を一周する池泉回遊式。また舟遊による庭園観賞も可能である。したがって、主要な景色は池の周囲に配されており、その数は11の部分からなる「景」を単位として見ていくことができる。この中には日本から運び込まれたと考えられる燈籠6基（内1基は破損。台石のみ）、コンクリート擬石製燈籠1基、並びに自然石の層塔1基（五重塔であるが一部を欠き現状では三重塔）が見られる。また、園地の南西端に接し鉄道高架橋があり、かつては借景的にこれを取り入れていたことが写真よりわかる（写真3）。以下これらの景に順次簡単な解説を加える（図1参照）。

（1）庭園建築（Pagode）

庭園内の主要建築で、一部に塔状部分をもつことから‘Pagode’と呼ばれ。この庭の設計者マルセルの書斎

として使用された、池方向に開ける景色を眺める主要ビューポイントである。（写真1）

（2）小池と流れ

庭園建築と大池の間はまとまった小庭園となっており、小池が二つと流れが見られる。流れは洞窟状の源から小池を経て大池へ注いでいる（現在水の供給無し）。自然石を配し日本庭園の流れを模したようにも思えるが、石組が稚拙であり、源がグロット状の形態であったり、小池の中心に大きめの自然石一石（噴水か？）をすえるなど、ヨーロッパの整形式、あるいは自然風景式庭園の一部に見られるディテールに、より近い構成である。

池畔には、燈籠2基（1基は破損、もう1基は春日型）と飛石並びに延段があり、日本的な庭園構成を見せる。この大池北東端は、池方向の奥行きをもって構成された景色を眺める、最も重要なビューポイントである。

（3）橋と滝（導水部）

モワンヌ川が池へ注ぐ導水部に橋が渡され、この橋の下部分が小滝となっている。また現在水は流れていないが、景色を構成する斜面状の滝筋がもう一つある。橋は石造アーチ橋で、橋飾りの石像は後で説明するカンボジア、クメールの仏窟等と同様1900年のパリ万国博覧会に出品されたものの転用であることが知られている。

(4) 四阿(あずまや)と藤棚

モワヌ川(川)の導入部、入江状の部分に四阿がある。この四阿は舟付も兼ねる棧堂の形態をもつ(写真3)。現在ここ周辺の護岸は石組護岸に修復されているが造園当初の写真より、四阿から南側の雪見燈籠のあたりが、洲浜であることが見える。

橋とこの四阿を結ぶ階段状の園路に、鉄筋コンクリート製擬竹を用いた藤棚があり、両者ともマルセルの設計の特徴を良く表している。前者は浄土の庭に見られる建築あるいは密教建築の形態を示し、かつては屋根に鳳凰の姿も見られた(現存せず)。マルセルが設計しパリ市内に現存するシネマ・パゴダ(Cinéma La Pagode)の日本式建築(1897年、図2)からも、こうしたマルセルの持つ日本建築の好みがわかる。なお現在の四阿は1986年、写真等から旧状に近い形に復原されたものである。

また、藤棚の擬竹については、当時のマルセルが好んでその設計の一部にコンクリートによる造形を試みていることから、彼の作風並びに当時の最新技術としての「コンクリート」の象徴ともいえよう。

この付近には日本から運ばれたと思われる(1900年パリ博覧会物の転用か?)、春日燈籠、雪見燈籠、そして園内では唯一の、巧妙に作られた擬石コンクリート製雪見燈籠が見られる。

(5) 金の角(la Corne d'Or)

「金の角」と呼ばれる点景物が先端に置かれた岬である。現在では基台部分のみであるが、庭園建築周辺から眺める景色に奥行きを与える「障り」の役割をもつものとして、重要な中景構成要素である。なお景色に変化をつけている岬は池南岸にこれを含めて三つ見られる。日本式庭園の伝統的手法である、大小の島による奥行き感の演出(心字池的構成)は見られないが、岬とこの対岸の小島の活用により日本的な景色の構成を図っている。

(6) 自然石の露頭

台地から谷にかけての斜面の一部に花崗岩の露出が見られる。現状では藪になり土に覆われているが、崖状の部分前面には配石したような石が見られ「瞑想の丘」と呼ばれる対岸の花崗岩層との対応から、園地造成にあたり人為的な景色の構成をしたと考えられる。いずれにしても自然状況のポテンシャルが日本庭園(石組)にむいている一角である。

(7) つつじ山(la Colline aux azalées)と橋

この部分は池の最奥部に位置し、橋で入江を渡った所にある。出島状の「つつじ山」と呼ばれる部分への入口である石の橋は反り橋の形をもち、園内では先にふれたアーチ橋、クメールの仏窟前の石橋、について大きな橋である。擬石造製の橋で、その両側部が一段高くそれぞれ一条の溝が見られ、たぶんかつては日本の土橋に似せ、土をかぶせて両脇に芝等下草類を植え込んだのではない

かと考えられる。この橋の手前には月形の火袋をもつ燈籠1基がおかれ、橋とは反対側山の向こうの園路にある同じ形態の燈籠1基と対になっている。

現在棚が崩れて地上を覆う藤蔭により、橋の一部が覆われ、池北東端建築周辺部から目立たない存在となっているが、かつては「つつじ山」と共に、北東端から望んだ景色の重要な構成要素であった。

「つつじ山」は比較的小ぶりの自然石を、同心円状に崩れ積みに築いた築山で、石積みの中の平坦地にツツジを植え込んでいた。園路は山裾を巡りかつては藤棚(コンクリート製擬竹製の棚と思われる)で覆われていた。その姿は1900年初頭に写された写真に見られるが、庭園建築周辺からは庭の最奥部、景色の中心と見える。

(8) 中島と水門(排水部)

池尻にあたる部分である。つつじ山からの園路はコンクリート製擬木製の筋違橋に導かれ水門の片端を支える小さな中島にいたる。園路はこの水門により途切れるが、現在下流部に迂回して橋が新設されている。筋違橋、中島、水門の関係からみて、かつてはこの水門の上が渡れたのではないと思われるが、この辺の部分の関係は資料がなく不明である。

(9) 瞑想の丘(la Colline des Méditations)

大池の北岸に位置する。園路は岸に沿って巡るが途中斜面を上る方向に道が別れる。この別れ道の周辺に人為的に組んだ花崗岩の石組がみられ、自然石の石段をへて丘(台地)の上へと登る。この一帯が「瞑想の丘」と呼ばれる部分で、ちょうど対岸にも先述した自然石の露頭があり、同一花崗岩層であると知れる。ここでは自然の露頭を活かしながらその周囲の自然石を整理、石組し直し現状に見られるようなものとしたのであろう。フランスに見られるものとしては、しっかりした石組であり、一部三尊石組の形態をもった石組も見られる。周囲の他の石が、この三尊石組と見える石組に向かうように配されていることから、かなり意図的に配石されたと考えられ、日本人庭師の関与を思わせる。

なお、現在瞑想の丘の上からは眺望が開けないが、池方向の斜面の樹木が30~40年生の小さな木であり、この木々はかつて修道士会が学校としてここを使用した時期(1954~1968年)に植栽したものという。したがってこれらの木々の無い状態で、丘の上から池方向へ眺望の開けていることが本来の姿と言えよう。

(10) 鶴島・亀島と層塔

池の北岸の中段に、二つのやや長細い島が見られる。西側の小さい方が亀島、東側やや長い方が鶴島。現状では木々に覆われ、また浸食による崩れから完全な形の石組としては見られないが、明らかに江戸時代以降の庭園に多く見られる鶴島・亀島を表す石組である。

二つの島はコンクリート製擬木製の筋違橋によって結ば

写真1. 池北東端 Pagode (1904年)

写真2. 反り橋付近 (1900年代初頭)

写真3. 四阿と灯ろう (1900年代初頭)

写真4. 現況のPagode (1987年)

れる。そして、岸から鶴島に渡る橋のあった後があり、造園当時の写真には高欄付きの日本式木橋の反り橋が見える(写真2)。写真で見るかぎり、日本のものにはほぼ同じで欄干には擬宝珠も見られる。また橋の向こう島側に鳥居もあった(現存せず)。そして、鶴島からやや間をあけた小島の上に石造の三重塔(かつての写真からは五重塔であることが知れる)がある。この小島は蓬莱島を表しているようで、この周辺一帯は日本庭園に見られる宗教的な要素を全て集めた構成をみせ、フランス国内では他に例の無いものである。

全体の景色の構成では、城方向から見た場合の池右側の中景となる。たぶんこの島々を越えて上の方に、斜面に続く瞑想の丘の石組が見えていたと思われる。

(11) クメールの仏窟と舟付、石橋

園路が庭園建築に近づく少し手前にカンボジア、クメールの仏像をおいた洞窟状の石造建築がある。中に石仏を祭るが、建築前面にも二対の石像が刻まれている。瞑

想の丘で二つに別れた道がまた斜面を下りて、この仏窟の前で合流する。この前には石の階段が池にまで続いて舟付となる。石段の舟付には左右2対の石像獅子が置かれている。これらもクメールのものといわれ、いずれもマルセルの関係した1900年のパリ万博から運んだものという。また、石段より城側園路の下に石造の橋がかかっている。園路上では気がつかないが、池畔からそのアーチ構造と、クメール風装飾を見ることができる。現在この橋は舟付に通じる石段共々、周囲の木々に覆い隠されているが、かつての写真には池の水面と石段、そして四体の獅子像がはっきりと写っている。

4. コルベール城と園地の沿革³⁾

城の歴史は1035年頃にまで遡り、コルベール家の所有となるのが1667年。以下ここでは日本庭園に関連して重要な近代以降の沿革を記述する。

1814年～1830年 コルベール家により現在のルイ13世様

- 式の城に再建。設計はヴィレール (Villers)。
- 1895年 この年コルベール家の事業の失敗から、実業家ベルジェール (E. Bergère) 氏に売却。
- 1899年 6月 マルセル、ベルジェール氏の娘と結婚。
- 1899～1913年 マルセルの設計により現状のような日本庭園を主体とした園地が造園される。(モワヌ川の堰き止め、池の造成、護岸の整備、燈籠・彫像などの設置。外来植物などの植栽。)
- 1906～1942年 城主ベルジェール氏死去後、夫人が城の管理をする。
- 1942年～1945年 マルセル夫人 (ベルジェール夫妻の娘) が相続しここに住まう。
- 1945年 アンジェのボン・パストゥール教団に譲る。
- 1954年～1968年 サン・テズブリ修道士会の学校として使われた後、生徒数減少のため学校を閉鎖。
- 1976年 三つに分割譲渡。城とその周辺は企業が買収。庭部分の2haをプロティエ中学が使用。残りの約28haを SAFER 農業組合が購入。
- 1980年 9月「1930年5月2日法」により、景観保護のため城と庭園が指定を受ける。
- 1981年 モーレグリエ町が庭園部分を買収。庭園の維持管理のため、コルベール公園協会 (l'Association Parc Colbert) を結成。(ボランティア活動による)
- 1985年 維持管理団体が東洋公園協会 (l'Association du Parc Oriental) と名称を変更。
- 1985年 6月有料の公園として一般公開。公園名は Le Parc Oriental de Maulévrier
- 1986年 常任管理者がおかれ公園の維持管理、運営にあたる。池畔の四阿 (舟付と兼用) が当時の写真をもとに復原される。

5. アレキサンドル・マルセルの略歴⁴⁾

Alexandre Marcel (1860～1928), 1860年パリ生まれ。Ecole des Beaux-Arts 卒業後、古建築の修復に携わる一方、シャテルギヨン (Châtelguyon) の温泉場、パリの邸宅、ショレのペローマイユ邸 (l'Hôtel Pellaumail) ベルジェール夫人の実家) 等の設計を手がけた。またヒマラヤのカプルタラ (Kapurthala) 大王のために、フランス式庭園に囲まれた古典的で壮麗な宮殿の設計をした。

設計の特徴としては、過去のものに興味を示しながら、当時最新の鉄筋コンクリートなどを使用することになり、また当時目新しかった東洋趣味もとり入れた。以下、年を追って建築家マルセルの主要業績などをたどる。

- 1860年 パリ市に生まれる。
- 1897年 パリのデパート、ボン・マルシェ (Bon Marché) の社長の要請で、パリ市バビロン通り

図2 マルセルの筆になるパリ、ボンマルシェのパーティー用東洋建築 (1897年)

(rue de Babylone) にパーティー用の東洋趣味の建築、通称「バゴダ (Pagode)」をつくる。現在は映画館の一部として外観をとどめている。(図2 参照)

- 1899年 6月コルベール城主ベルジェール氏の娘と結婚。
- 1899年～1913年 コルベール城の日本庭園を造園。
- 1900年 パリ万国博覧会に参加。カンボジア・パピリオンの地下室に設けられたアンコールワットの複製や、フランスから極東までを建築でめぐる世界一周パノラマの設計 (日本式五重塔を中心とする) を担当。これがベルギー王レオポルド (le roi Léopold II) の目にとまり同国内の、日本式の塔、中国の亭舎をもつレイケン (Lae-ken) 公園を設計する。同時に、アンパン男爵 (le Baron Empain) のためにエジプト、カイロ市の郊外の砂漠にニュータウン、ヘリオポリス (Héliopolis) を計画する。
- 1913年頃 インド・日本へ約半年間の旅行。東京のフランス大使館建築計画を作成。この計画は第一次世界大戦勃発のため中止。現存図面には彼の折衷主義的なデザインの特徴がよく表れている。
- 1926年 Académie des Beaux-Arts に推挙される。
- 1928年 68歳で没する。

6. フランスにおける日本庭園導入の時代背景とモーレグリエの日本庭園

日本が欧米5カ国との間に修好通商条約を結ぶのは1858年である。その後1865年頃より西欧諸国と本格的な貿易が始まり、19世紀末から20世紀初頭にかけて日本からの文物や、日本を紹介した書籍がその基盤となってヨーロッパでは日本ブームがおこる。クロード・モネに代表される印象派の画家たちに与えた浮世絵の影響は殊に有名であるが、庭園分野では1873 (明6) 年ウィーン万博に初めて日本館と日本式庭園が造られ好評を博した。

同じく1878（明11）年のパリ万博にも庭園的展示が行われ、1893（明26）年シカゴ万博、1900（明33）年パリ万博には日本建築と共に庭園が出品された。

この20世紀を迎えたパリ万博には庭園と日本文化の紹介に関し、特筆すべきことが二つあった。一つは彼の地に日本庭園を実際に造園すると共に、日本で制作した庭園の模型と、国内に実在する庭園の写真を展示し、外国に対する日本庭園紹介の仕方について一つの発展をなしたことである⁵⁾。もう一つは、フランス郵船の提供のもとに、フランス人建築家の手による五重塔を中心とした日本式の建築が、世界一周パノラマ館として出品されたことである⁶⁾。1900年当時、こうした日本建築に理解を持ったフランス人建築家があり、日本の文化の一端を彼の国に紹介していたわけだが、実にこの建築家こそモーレヴリエの日本庭園の作者、アレキサンドル・マルセルその人であった。

こうした1900年パリ万博の状況から、当時のフランスにおける日本文化あるいは日本庭園についての知識の摂取状況がわかるが、これに先立ちイギリス人建築家ジョサイア・コンドル（1863～1920）により日本庭園を詳細に紹介した本“Landscape Gardening in Japan”（1893・Tokio）が著され、写真を多用した補遺と共に、欧米人の日本庭園理解に一段の功績を残している。また、こうした欧文成書に先行して、浮世絵などの絵画や絵付け焼き物、あるいは土産ものとしての写真、スケッチ、見聞記などが日本より海外に運ばれ、そこに描かれた日本庭園あるいはそれに準じた風景が日本庭園のイメージとして欧米の人々に迎えられた。こうした時代背景から、ヨーロッパに日本庭園が登場するのは19世紀の終わりから20世紀にかけてである。そしてモーレヴリエの日本庭園は、こうした時代にマルセルという外国人の体験を通して、文化としての日本庭園が、外国において具体的な形をもった最も早いものの一つであった。

7. おわりに

モーレヴリエの日本庭園は、日本式庭園と呼ぶに相応しい結構をもっている。そして庭園史の上からだけでなく、

日本、フランスの文化交流の上からも意味のある場所であることが、本調査研究から判明した。現在国の援助も徐々に受けながら、園地の修復、復元工事が進められているが、限られた予算（年800万円程度）での実施であり往時の姿に戻すのに時間がかかりそうである。

こうした状況の中我々の現地調査は1987年8月28～30日、9月2～3日に実施したが、限られた時間内での調査であり更に詳しい調査の機会が欲しいところでもある。また、フランスにおけるこの庭の意味を考える時、庭の修復にあたっては日本側からも何らかの援助ができないものか、考えさせられる問題である。

最後になったが、本調査研究のきっかけをおつくり頂いた東京工業大学中村良夫教授、東京農業大学鈴木忠義教授、並びに調査に係わって多大な援助を賜った和田貞次氏に感謝の意を表する次第である。なお、モーレヴリエの日本庭園の往時の写真はフランス環境省ニコル・ル・ネベズ夫人（Nicole Le Nevez）から提供を受けた。

文献及び注

- 1) 佐藤昌（1986）：外国における日本庭園－初期の造園－，造園雑誌49（3），167－188
- 2) 河原・鈴木・ジャンネル（1987）：モーレヴリエの日本庭園－20世紀初頭に造られた庭園の現況と成立経緯，東京農業大学庭園学・造園学原論研究室このレポートは現地関係者のこの庭への理解を目的とし、仏国内の類似庭園との比較、修復に係わるディテールの図示を主たる内容としている。
- 3) Ouvrard, Louis and Hérault, André- Hube-rt（1983）：Histoire du Château des Colbert en Maulévrier, Herault Maulévrier を参考とした。
- 4) “Le Parc Oriental de Maulévrier” Herault Maulévrier 1987. を参考とした。
- 5) 楫西貞雄（1948）：海外万国博覧会に於ける日本庭園，造園雑誌12（1），8
- 6) 文献1）171，187で佐藤はこの出品が注目されること、詳細の後考を待つ旨を述べている。

Summary : Very few Japanese gardens have been known to exist in France. The garden of Maulévrier is Japanese in style and has one of the longest history as a Japanese garden in European countries. It was constructed in the early 20th century by a French architect, Alexandre Marcel. He was known as a designer of Cinéma La Pagode (Japanese style architecture, 1897), in Paris, which had an admirable Japanese garden. And also he designed a Japanese style five storey pagoda at the Paris International Exposition in 1900, which made even Japanese people surprised. By reason of its comparatively large strolling garden style and its historical meanings, we concluded that the Japanese garden of Maulévrier is to be recorded in garden history.